

# 若年女性の「ホーム」の中の居づらさ

## —フェミニスト地理学の視点から—

徳竹 綾香

本研究は、若年女性の「ホーム」の中の居づらさという生きづらさの内実を、インタビュー調査を通じて明らかにすることを目的とする。

1990 年代に雇用が流動化し、増加するホームレスや若者の労働問題が顕在化したが、それらの多くは男性の問題であった。若年女性の生きづらさについては、2010 年代になってようやくメディアやルポルタージュなどによって認識されるようになったが、ジェンダーの視点を取り入れた研究は依然として少なく、構造的な分析はなされていない。性別役割分業によって、女性は経済的にも住まいを確保する上でも家族に包摂されている。不安定な雇用環境は女性が世帯の中で家族に扶養されていることが前提となっている。女性の貧困は世帯の中では見えないが、世帯の外では可視化されている。

そのような背景のもと、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、家に居場所のない若年女性の存在が明らかになった。感染拡大防止策としてなされた外出自粛、学校の休校、飲食店やネットカフェの営業自粛によって、家で安心して過ごすことができない若年女性は行き場を失った。コロナパンデミック下における標語「ステイホーム」の「ホーム」は安心安全で親密なイメージを想起させる。しかし、「ホーム」が全ての人にとって安全な場所であるとは限らない。例えば、2020 年度に女性から寄せられた DV の相談件数は 19 万 0,030 件と前年度比で 1.6 倍増加しており(男女共同参画局, 2021)、外出自粛によって家にいる時間が長期化し、家族に暴力を振るわれる女性の存在が明らかになっている。コロナ禍のもとでようやく家庭の中の居づらさに焦点が当てられるようになってきた。従来の若年ホームレスの研究では、「ホーム」の外が不安定であることと対比する形で、「ホーム」の内は安定的であることが示されてきたが、そのようなホーム/ホームレスの二項対立的な思考は、女性にとっての「ホーム」を不可視化してしまう。

本研究は既存の研究で前提となっているホーム/ホームレスの二項対立に依拠せず、フェミニスト地理学の「ホーム」の概念を援用することによって、若年女性の「ホーム」の中の居づらさを可視化

させた。ここでは、「ホーム」に関するあらゆる二元論を乗り越えようとする視点として、「ホーム」を次の 9 点の観点から分析することが提起されている(福田、2008)。その視点とは、①公私の交差の仕方が時間・空間によって異なるもの②公的なものと私的なものの双方を通して構成される、交差する領域③抑圧と抵抗の場④多様な生きられた経験の場⑤概念的にも隠喩的にも経験的にも可変性を有する⑥流動的なもの⑦物質的であると同時に想像的なもの⑧アイデンティティや権力とかわるもの⑨マルチスケールで常に開かれたものである。本調査研究は、これら 9 点の視点を生かし、定位家族と同居するなかで生じる居づらさという生きづらさを抱える若年女性の経験を明らかにした。具体的には、若年女性の「ホーム」とは、一般的にイメージされる家庭空間とは異なり、抑圧的な経験を有するものであった。そのような中でも彼女たちは絶えずして公私の境界線を家族との間に引き直しながら、居づらさをなんとかやり過ごしていた。しかし、どうしても家の中で過ごせない場合には、一夜限りで過ごす場所を外に探す者もいた。また、彼女たちは非家族との共同生活を経験することによって、実家以外に新たな帰属先を増やすことを試みていた。

本研究は、親と同居する若年女性を対象としているために、離家に向けた居場所・居住支援にまで射程を広げて考察を深めることができなかった。そのため、今後の課題は居住支援の実践例の効果や課題を検証し、社会学的な空間分析を発展させることである。具体的には、文化地理学を基礎とした社会学的な空間理論の系譜を整理しつつ、日本での展開可能性、とりわけ「ホーム」概念の刷新を検討する必要がある。日本において「ホーム」は安心安全で親密なイメージを想起させる。また、ホームレスの概念は、欧米の場合は短期シェルターや居候の人々をも含むが、日本の場合は路上生活者のみを意味しており、より狭義的である。このことから、日本の居住政策は立ち遅れていることが分かる。これに対して、居住福祉の分野では、早川(1997)が、居住は基本的人権であるとして、社会保障に居住を位置づけようとした。家族社会学の分野では、久保田(2011)が家族以外の社会的関係としての共同生活の場を含めた生活圈、親密圏、ケア圏の必要性を述べている。今後の研究では、これらの知見に加えて、フェミニズムで論じられてきた自立／依存の二分法の問い直し、フェミニスト地理学における「ホーム」研究の知見を参考にしながら、既存の家族とは異なる新たな”居住”の理論的な枠組みの構築を目指していきたい。